

加曽利貝塚博物館所蔵、荒屋敷貝塚ならびに

緑町小学校古人骨の保存状況

久保大輔・諏訪 元

はじめに

昭和24年と25年に荒屋敷貝塚から出土した人骨資料と、おそらく昭和30年代末に園生貝塚から出土し緑町小学校社会科資料室に保管されていた人骨資料が、平成15年7月ごろに加曽利貝塚博物館に収蔵された。同博物館における予備的な整理により、荒屋敷貝塚の人骨は「1号体」、「2号体」と他の個体を含むこと、緑町小学校の人骨は若年1個体を含む5個体分の骨資料からなること、などの解釈が提示されていた。

今回の標本調査では、これらの人骨資料をより詳細に観察、同定し、個体構成などの基礎情報を整備することを目的とした。

結果、今回の荒屋敷貝塚の人骨資料は、少なくとも成人5体、子供1体分の人骨からなり、1号体とされている頭骨と四肢・体幹骨は同一個体として矛盾なく、小柄な高齢の男性と考えられる。2号体とされている人骨資料は、幼児骨、比較的若い成人男性の部分骨、高齢の女性と思われる頭骨、などの人骨が混在していることが確認された。また、今回の緑町小学校の人骨資料は、少なくとも5個体分の人骨が混在し、10代前半と推定される若年個体1個体、10代末～20代前半の女性が1個体、このほかにも成人個体が少なくとも3個体は含まれ、性構成としては女性が少なくとも2個体含まれていることが確認された。

1. 荒屋敷貝塚

本標本群は、千葉市荒屋敷貝塚、本庄市次郎氏（当時）宅にあった人骨と庭の崖に露頭していた人骨からなり、加曽利貝塚博物館が、平成15年7月に荒木ヨシ氏から譲り受けたものである。昭和24年と翌25年の調査で、それぞれ1体分の人骨として収集されたが、その後、荒木ヨシ氏の保管中に鼠害による混乱があったと考えられている。

今回、東京大学総合研究博物館に搬入した時点においては、黒字で「二五、五、二十」との表記がある人骨を含む「1号体」、黒字表記のない「2号体」、そのほか第3個体のものが含まれるかもしれない、との加曽利貝塚博物館側の評価が付随していた。

今回の整理・観察により、四肢骨の重複や大きさ情報から、少なくとも成人5体、子供1体分の人骨が混在していることが確認された。昭和25年調査の1号体とされている頭骨と四肢・

体幹骨は同一個体として矛盾はなく、小柄な高齢の男性と考えられる。一方、2号体とされている人骨には、幼児骨、高齢の女性と思われる頭骨、比較的若い成人男性の部分骨、そのほか断片的な人骨が混在していることが確認された。

1号体（第1図）

搬入時に1号体とされていた人骨は、主として1個体分の四肢骨と頭骨からなる。今回の鑑定結果では、1）四肢骨分は同一個体のものと考えられ、2）頭骨については、四肢骨と同一個体であるかどうか確定することはできないが、保存状況（残存部位の完形度や標本の色）から同一個体として矛盾はない。頭骨、四肢骨ともに男性のもと思われる、年齢は熟年から老年と推定される。

頭骨（第2図）

上顎下顎ともに歯牙が殆ど脱落して歯槽部が変形していること（下顎左第一小臼歯は残存）、また縫合の閉鎖・消失が進行していることから、高齢であると推定される。下顎骨は華奢であるが、乳様突起は発達しており、男性と推定される。

四肢・体幹骨

成人の主要四肢骨1個体分（第3図a，b）に左右の別が黒字で表記されており、これらの幾つかには「二五．五．二十」との表記がある。また同様の黒字で、右肩甲骨片1つと右肋骨片複数に「右」との表記がある。対をなす主要四肢骨は形態特徴から同一個体の左右と考えられ、これらの主要四肢骨は、他にも同一個体として矛盾する所見がないことから、おそらく同一個体のものだろう。主要四肢骨は総じて小ぶりで若干女性的ではあるが肩甲骨は男性的にも見える。また骨棘や関節症の傾向は部位によって、若干認められる。大腿骨は強い柱状性を示し縄文時代人的であるが、脛骨の扁平性は目立たない。

足根骨と中足骨は1個体分からなり、関節部の形態の整合性から主要四肢骨と同一個体であると推定される。手根骨、中手骨、鎖骨、肩甲骨は重複しており、少なくとも2個体からなる。寛骨は形態的特徴から小柄な男性のものである可能性が高く、恥骨結合面から少なくとも壮年以上の年齢のもと思われる。これらは、主要四肢骨と同一個体として矛盾しないものである。

椎骨は2個体分が混在しており、関節部もしくは椎体付近に骨増殖を示していることから、いずれも高齢であると推定される。腰椎には加齢のみでは説明できないほどの重度の骨増殖が認められた（第3図c）。上述の通り、四肢骨には高齢であることを示す特徴は顕著ではなかったが、椎骨と四肢骨とが同一個体のものである可能性を排除するものではない。

なお、2個体分の混在が確認された上肢骨および椎骨は後述の2号体主要頭骨と同一個体と

しても矛盾はなく、2号体から混入した可能性があるが、対応関係を判定できないため今回は1号体として記載した。

2号体（第4図）

少なくとも成人3個体分の頭骨と、成人4個体分と子供1体分の四肢・体幹骨を含む。1号体と違い、人骨に調査年月日の表記がなく、これらの人骨がそれぞれいつの調査に由来するのかは不明である。

個体としてのまとまりを特定するのは難しい状況だが、四肢骨のうちの約半数は1号体よりも大きい成人男性のものと推定される。これらは、比較的若い成人個体と思われる下顎骨と同一個体である可能性がある。

一方、主要の頭骨標本は高齢の女性のもと思われる、保存状態の類似から、この頭骨と同一個体の可能性がある四肢骨も若干存在する。

頭骨

左側頭骨の重複から少なくとも3個体分含まれる。比較的保存状態の良い1個体（第5、6図）はやや女性的で、下顎大臼歯が全て脱落し歯槽が変形していることから高齢であると推定される。この個体のもと思われる残存歯は上顎右第一小臼歯、第二小臼歯、下顎右側切歯、犬歯、下顎左中切歯、側切歯、犬歯、第一小臼歯の8本である。

この頭骨とは別個体の下顎骨（第7図）、左頭頂骨片、および2つの左側頭骨片が存在する。頭頂骨片と側頭骨片の1つは接合するが、下顎骨とそれ以外の断片骨が同一個体であるか判定することはできなかった。下顎骨の個体のもと思われる残存歯は、上顎左犬歯、下顎右側切歯、犬歯、第一小臼歯、第二小臼歯、第一大臼歯、第二大臼歯、第三大臼歯、下顎左中切歯、側切歯、犬歯、第一大臼歯、第二大臼歯の13本である。咬耗の程度から、比較的若い成人男性のものと推定される。

四肢・体幹骨

成人の右上腕骨が4個体分重複している。サイズや保存状態から恐らく同一個体の男性のもと考えられる主要四肢骨、膝蓋骨、鎖骨、手足の骨、寛骨片等が存在する。鎖骨の骨端が癒合していることから、年齢は20代後半以上であると推定される。ただし、これらの四肢骨には特に高齢であることを示す特徴は見られず、保存状態の類似と合わせて、上記の下顎骨と同一個体である可能性が考えられる。

上肢骨のうちの2個体分は小柄で、恐らく女性のものである。これらの一部（左右の前腕の骨）は保存状態の類似から主要な頭骨標本と同一個体の可能性がある。

このほかに10歳前後と推定される個体の右腓骨と右鎖骨がある。

2. 緑町小学校社会科資料室から検出された人骨（第8図）

本標本群は、平成15年7月まで緑町小学校社会科資料室に保管されていたものであり、昭和30年代末の園生貝塚の調査で出土した人骨である可能性が高いとされている。今回、東京大学総合研究博物館に搬入した時点においては、下顎骨から最小個体数が5であり、M3が未萌出の若年個体が1個体含まれている、との加曽利貝塚博物館側の評価が付随していた。

今回の整理・観察により、下顎骨の同一部位の重複、頭蓋冠の骨の重複と保存状況、それぞれの評価から、少なくとも5個体分の人骨が混在していることが確認された。

そのうちの1個体は、下顎骨標本における歯牙萌出・咬耗状況から10代前半と推定される。

また、10代末～20代前半の女性が寛骨から少なくとも1個体確認され、これと同一個体と思われる胸椎、腰椎、仙骨が存在する。

このほかにも顎骨から成人個体が3個体分、成人の四肢骨が少なくとも2個体分ある。

性構成としては、女性が少なくとも2個体含まれているが、それ以上の性別は特定できない。各部位の詳細は以下のとおりである。

頭蓋骨（下顎骨以外）

前頭骨片3個体分と、それと縫合部で接合しない頭頂骨2個体分から判断して少なくとも5個体分ある。前頭骨2個体分と後頭骨・側頭骨片1個体分はやや華奢で、うち1つの前頭骨は薄く、若年の可能性があり、もうひとつの前頭骨と後頭骨・側頭骨片は保存状態の類似から同一の成人女性のものである可能性がある。

上顎骨片が2対と遊離した上顎左犬歯と上顎右第一大臼歯（第9図b）がある。これらのうちの完形に近いほうの上顎骨片（第9図a）には右第一小白歯、第一大臼歯、第二大臼歯の3本の残存歯がある。左第三大臼歯の歯槽部には骨吸収が見られ、右第一、第二大臼歯は生前に脱落している。従って、壮年期以後の成人だった可能性が高い。

下顎骨

下顎骨片の同一部位の重複から少なくとも5個体分存在する。それらの推定年齢と性別および歯牙残存状況は下記に示すとおりであるが、上顎骨ならびに頭骨片との対応関係については今回は判定できなかった。

・10代前半性別不明、下顎右第一大臼歯、第二大臼歯、下顎左犬歯、第一小白歯、第一大臼歯、第二大臼歯、未萌出の第三大臼歯が保存されている（第9図c）。前述の上顎右第一大臼歯（第9図b）と同一個体である可能性が高い。

- ・成人性別不明、下顎左第一小白歯、第二小白歯、第一大白歯、第二大白歯が保存されている（第9図d）。
- ・成人女性、下顎左第三大白歯が保存されている（第9図d）。
- ・成人性別不明、残存歯なし、左第三大白歯が生前に脱落している（第9図d）。
- ・成人性別不明、残存歯なし、左犬歯の歯槽部に骨吸収が見られる（第9図d）。

四肢・体幹骨

寛骨片の重複から少なくとも3個体分ある。うち1対のもっとも保存状態のよい寛骨片（IN1）は、女性のもので、腸骨稜の癒合状況から10代末～20代前半であると推定される。耳状面の一致、椎体の骨端癒合状況から判断して、仙骨、2つの胸椎、2つの腰椎がこの寛骨と同一個体と推定される。もう一つの保存状態のよい寛骨（IN2）は成人女性のものであると推定される。残りの重複している寛骨片（IN3）は極めて断片的であり性別は不明だが、下前腸骨棘は癒合している一方、特に高齢の特徴はない。

主要四肢骨は、少なくとも2個体分からなり、総じて小さく女性的である。また、これらの骨端は既に癒合しているものの、いずれも関節症や骨棘などの傾向を示しておらず比較的若い成人個体のものであると思われる。ほぼ完全な脛骨（T1）は左右の腓骨に対して、上腕骨（H1）は尺骨に対してやや小さいためそれぞれ別個体のもものと推定される。このほか左肩甲骨片が2個体分重複している。

手足の骨も少なくとも2個体分からなる。右第4中手骨が重複している。左第3、第5中足骨に対して右第2中足骨は大きく、別個体と推定される。

左上腕骨遠位（H1）、左脛骨（T1）、右距骨、右踵骨、手の骨、左中足骨は、いずれも小ぶりで若い印象を与えるという点で共通しており、女性寛骨（IN1）と同一個体の可能性がある。ただし、T1とは別個体の腓骨もまたIN1と同一個体であっても矛盾しない骨年齢を示している。また、成人寛骨IN1からIN3のサイズの違いも明瞭でなく、3個体分の寛骨とそれ以外の四肢骨の個体関係を確定することはできない。

断片的な肋骨が複数本存在し、保存状態のやや異なる一本を除き、恐らく同一の若い女性のもと思われる、女性寛骨IN1かIN2と同一個体である可能性がある。

この他、壮年以上のもと思われる骨棘の発達した腰椎およびいくつかの断片的な椎骨が存在するが、これらと同一個体と思われる他の部位を特定することはできない。

久保大輔（東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻・博士課程）
諏訪 元（東京大学総合研究博物館）

図の説明

第1図 荒屋敷貝塚1号体保存状況。

第2図 荒屋敷貝塚1号体頭骨。(a) 前面観、(b) 側面観、(c) 同一個体の後頭骨片。

第3図 荒屋敷貝塚1号体。(a) 主要上肢骨、(b) 主要下肢骨、(c) 重度の骨増殖により癒合した第3第4腰椎。

第4図 荒屋敷貝塚2号体保存状況

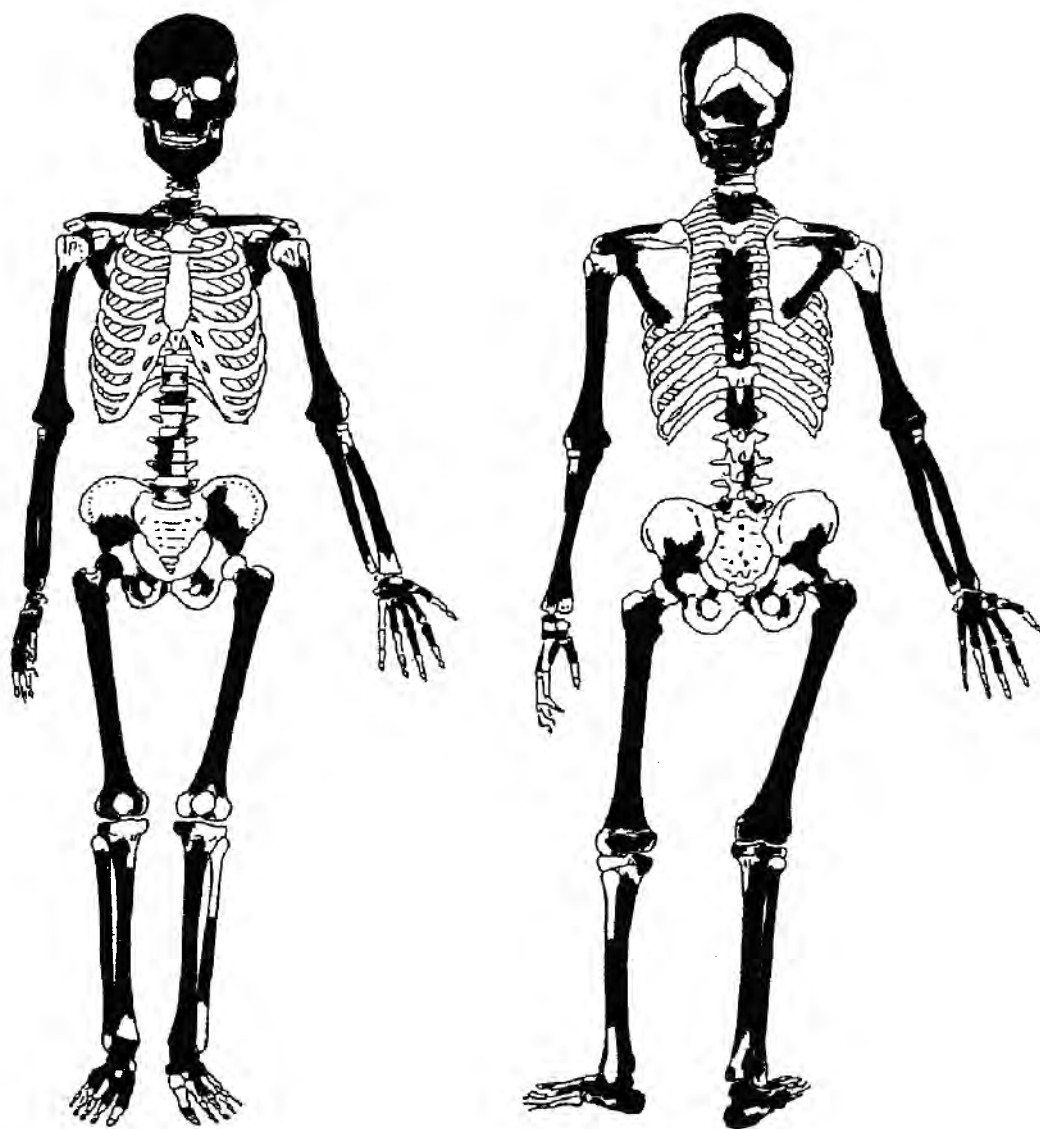
第5図 荒屋敷貝塚2号体頭骨。(a) 主要頭骨の前面観、(b) 同側面観。

第6図 荒屋敷貝塚2号体頭骨片 (第5図と同一個体)。

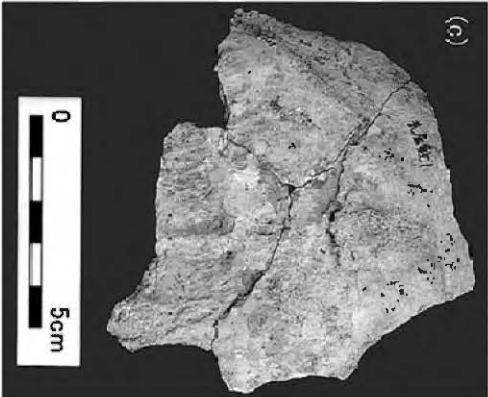
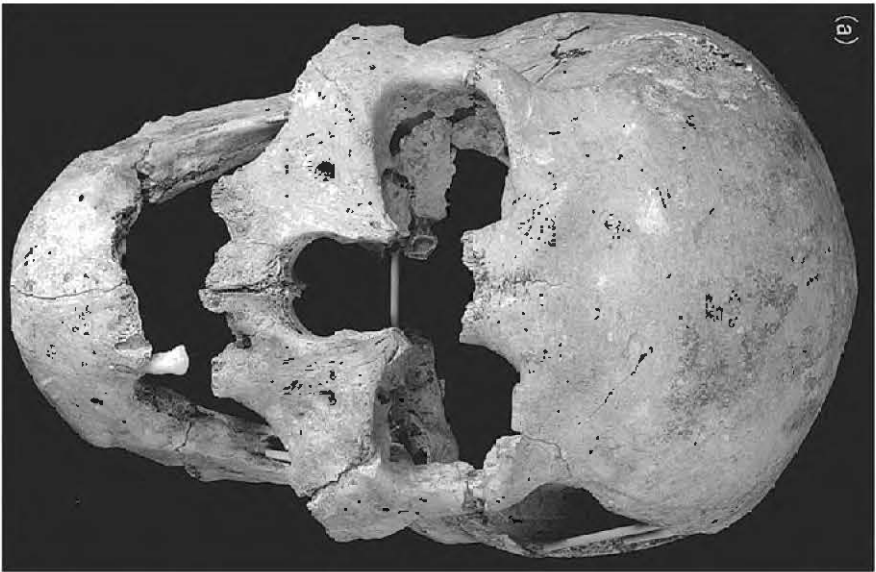
第7図 荒屋敷貝塚2号体下顎骨および遊離歯 (第5図と別個体)。

第8図 緑町小学校社会科資料室人骨保存状況。

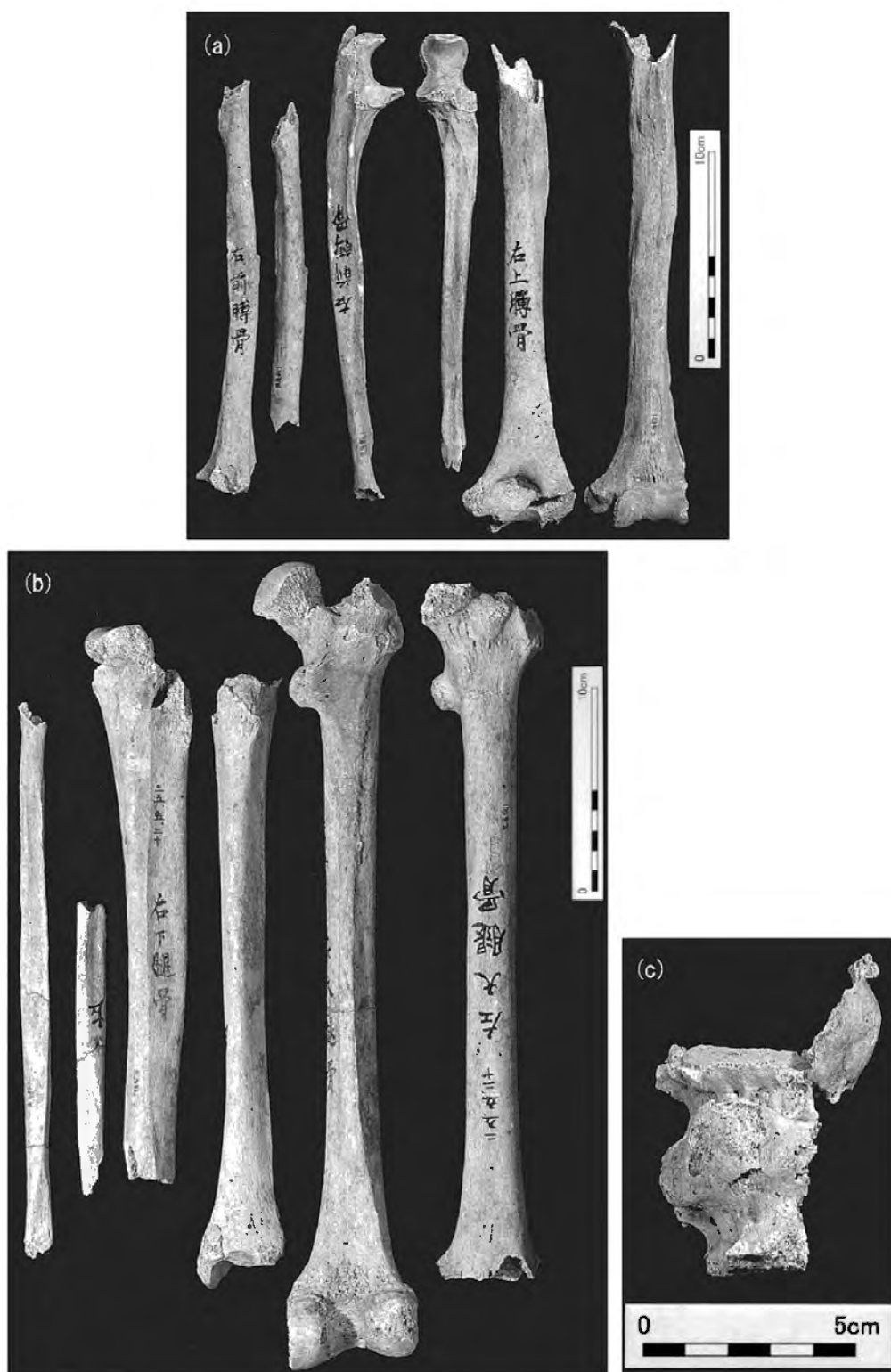
第9図 緑町小学校社会科資料室人骨。(a) 上顎骨片、(b) 上顎遊離歯 (左犬歯、右第一大臼歯)、(c) 未成人下顎骨、(d) 成人下顎骨片。



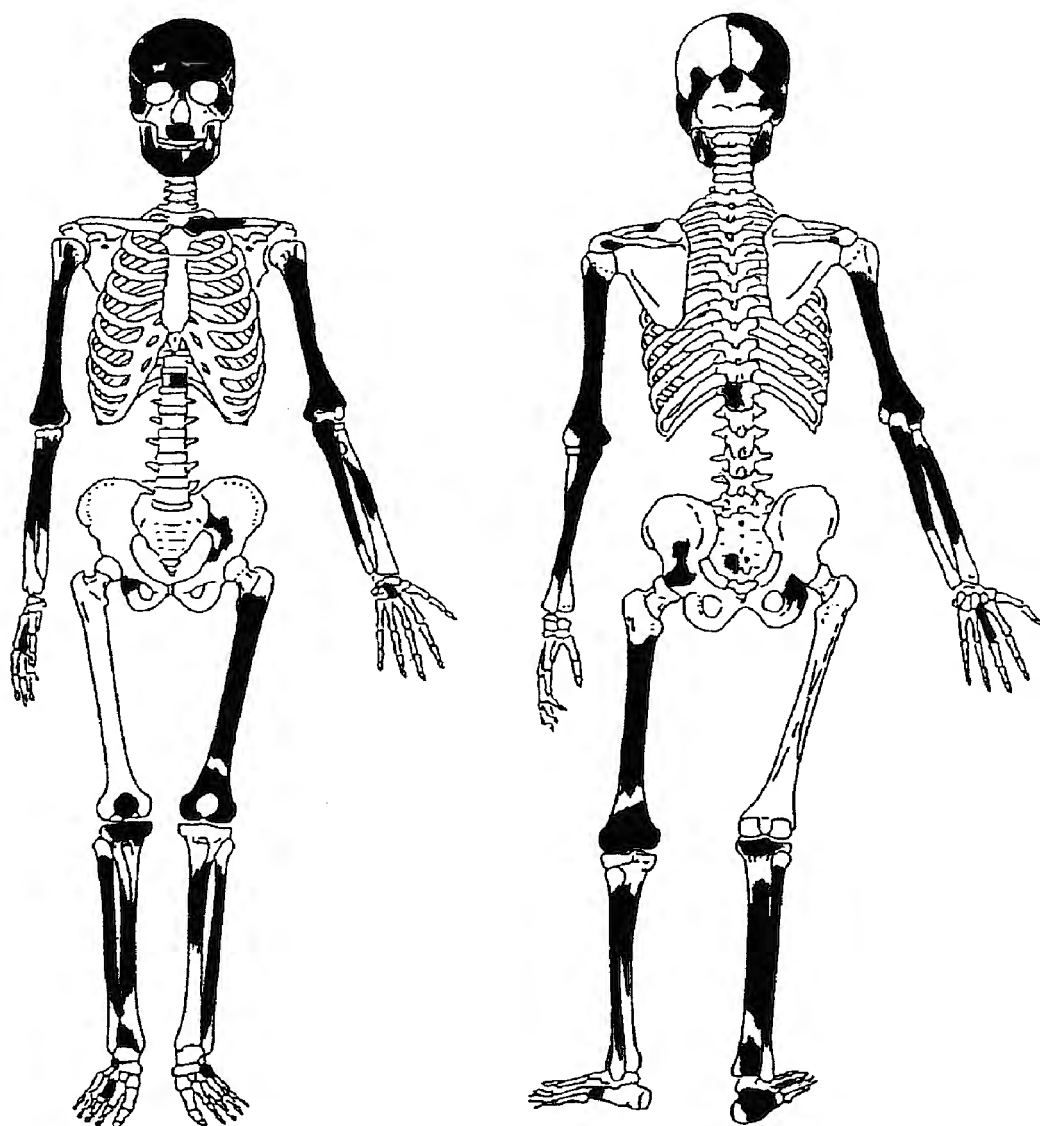
第1図



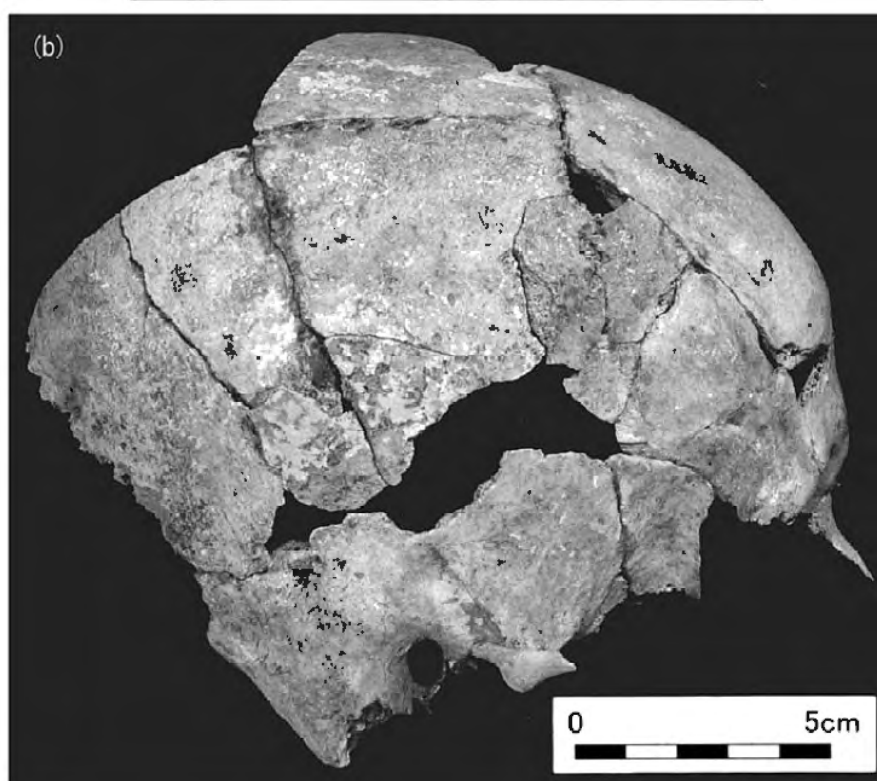
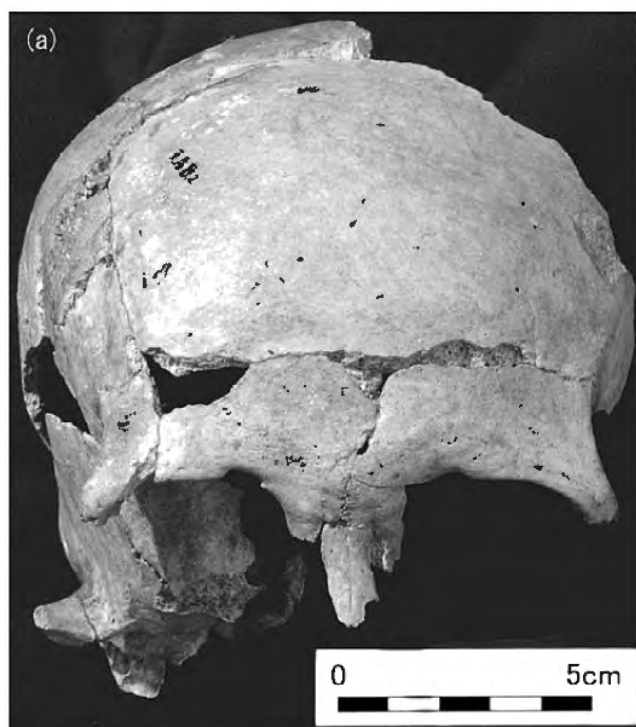
第2图



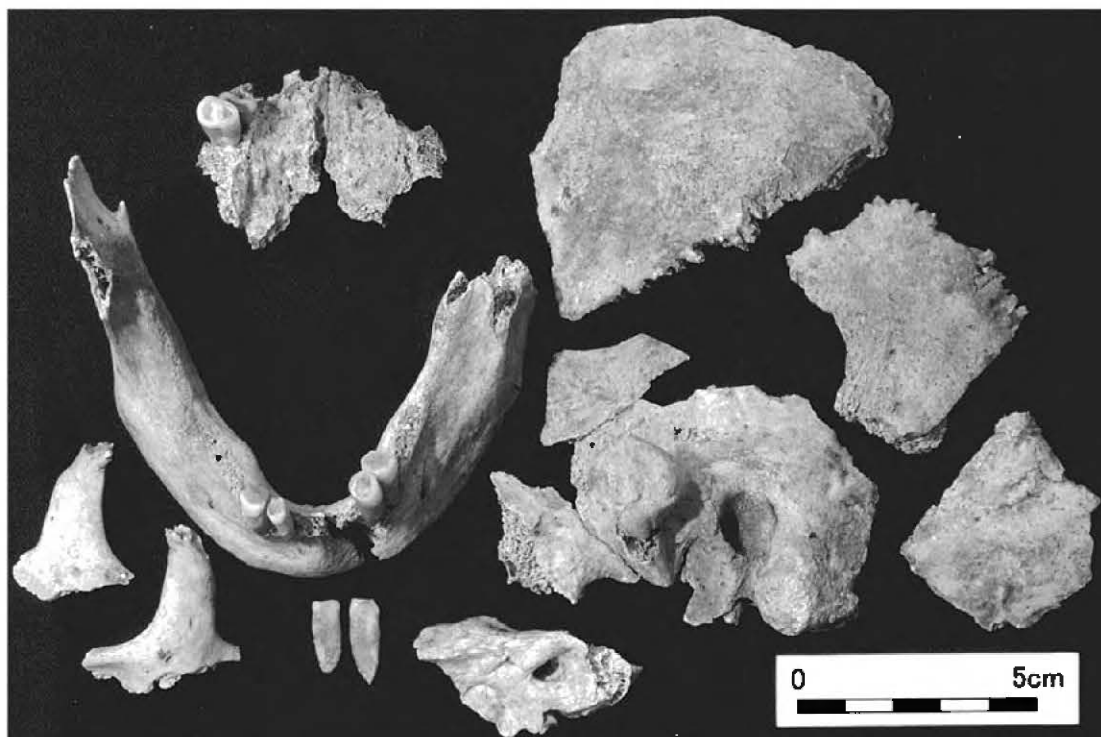
第3図



第4図



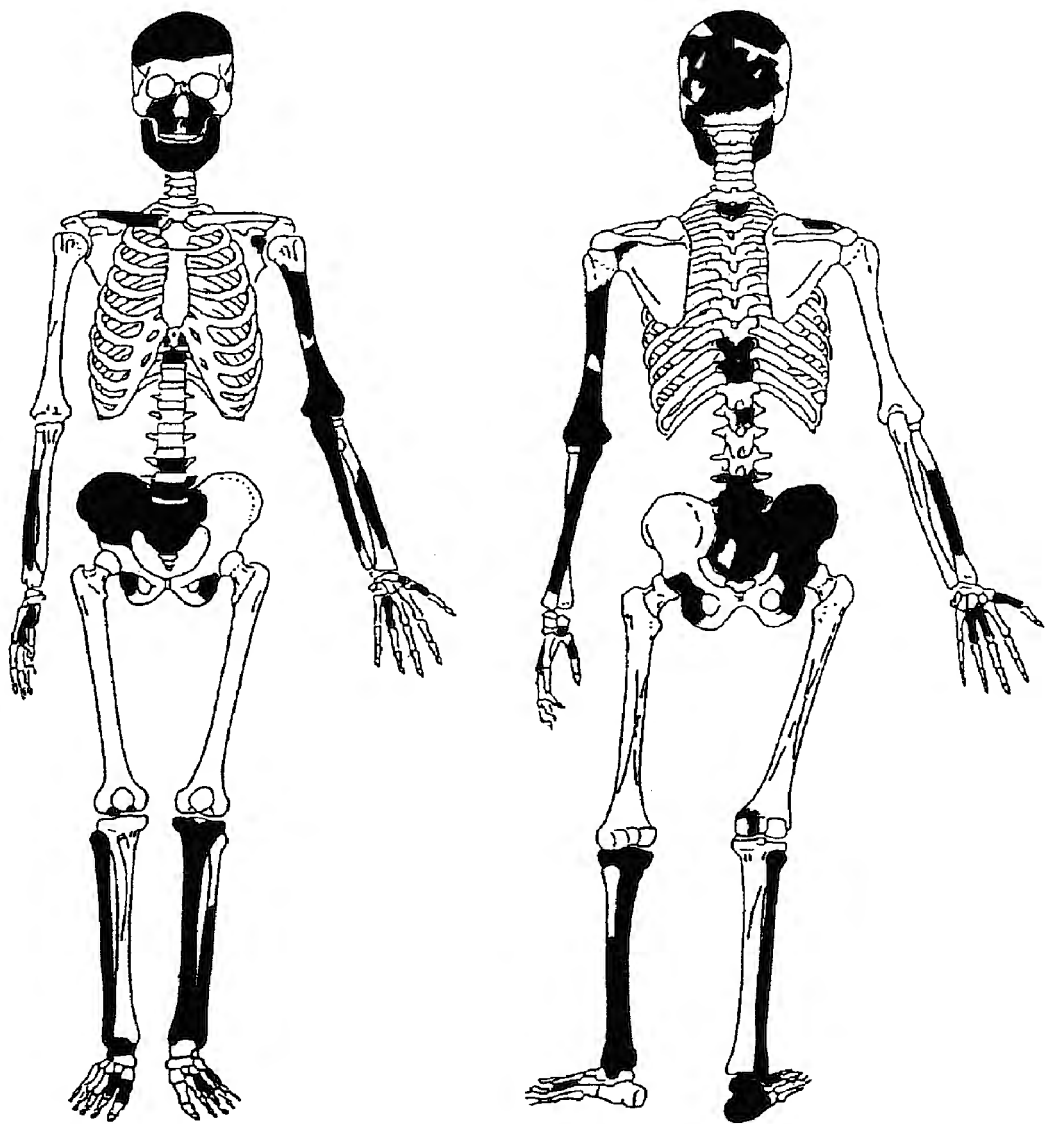
第5図



第 6 図



第 7 図



第8図



第9図